

日本統治下台湾人児童の日常生活について(その2)

— 国語教科書を手掛かりに —

陳 虹彬

要 旨

本研究は同誌17号の「日本統治下台湾人児童の日常生活について — 国語教科書を手掛かりに —」の続編である。今回は台湾人児童が通う公学校を中心に、子ども達が過ごした学校生活と受けた教育の内容について考察を行い、教科書及び卒業記念誌、写真帖、教育雑誌などの資料を駆使し、公学校生活の実態を明らかにしたものである。台湾人児童にとって、近代的な公学校教育は新鮮で楽しいものだったが、経済や産業の要素を優先とした教育方針や実業科目の設定などの点からみれば、植民地統治が持つ経済目的を忠実に反映したのもであった。公学校は基礎知識のみならず、基本的な生活能力及び実業技能を培う場でもあった。

〔キーワード〕 植民地教育、台湾、教科書史、植民地教科書、児童生活史

はじめに

本研究は同誌17号の「日本統治下台湾人児童の日常生活について — 国語教科書を手掛かりに —」の続編として、台湾人児童の学校生活を中心に考察を行ったものである。17号で発表したものは台湾人児童が使っていた国語教科書を材料に、彼らの家庭生活について検討を行ったものであり、関連する教材の内容は時期によって変化が見られ、中に述べられている児童像も時期によって違っていることや、大半の教材は、統治側が望む「理想像」が述べられ、子どもが営んでいる現実の生活とは完全に合致していなかったことを明らかにした¹⁾。今回は台湾人児童が通う公学校を中心に、子どもが過ごした学校生活や受けた教育の内容について考察を行う。

さらに、分析の対象は国語教科書に限らず、公学校で使用されていたほかの科目の教科書まで範囲を広げ、文献的な考察を行う。また、当時から残されてきた学校の卒業記念誌、写真帖及び教育雑誌などの内容を参考に、教科書の内容と照り合わせながら、教材や挿絵の中の台湾人の子どもはどのように描かれているのか、どのような学校生活を送っていたかをも明らかにする。

1. 植民地統治下の台湾人児童について

まずは右の写真1をご覧ください。この写真は1920年代に台湾を訪れた外国人が撮影した台湾人の女子児童たちの写真である²⁾。写真の下の説明書きによれば、この女の子たちは孔子廟の前で授業が始まるのを待っていて、現在その孔子廟は日本人の手によって学校になったとのことであった。「廟(びょう)」というのは日本の神社やお寺のような建物で、神様や神霊などが祀られているところである。日本統治以前の台湾には近代的な「学校」がなかった。子どもたちは「書房」という



Formosan school-girls waiting for classes to begin in an ancient temple of Confucius which the Japanese have turned into a school

写真1

ところ（日本の寺子屋に相当する）で勉強していた。「書房」での教育は地域にある廟などの部屋を借りて行われていた。後程説明するが、台湾での公学校は基本的に地域の住民と経費によって成立・運営していたので、信仰の中心となる廟は大半が地域の中心に位置し、スペースもあるので、公学校を設置するのに最適な場所であった。台湾人児童が勉強する内容も書房での漢文中心の読み書き教育から、科目がきちんと設定されている近代的な学校教育へと変わっていった。

そもそも書房はすべての子どもが通えるところではなかった。経済的に余裕のある家庭の台湾人児童だけが学費を払って通っていた。また、当時の台湾社会は「男尊女卑」の考え方がとても強かったので、書房に通えるのも主に男子であった。書房へ行って勉強する裕福な家庭の女子もいたが、ごく限られた一部であった。

また、写真1の中に縄飛びをしている女の子たちは纏足ではなく、裸足で楽しく跳び回っている。その姿は一般の女の子も普通に入学できる公学校が設置された以降のことだと考えられる。それでも、当時公学校生徒の構成を見ると、女子生徒の数は一般的に男子生徒の数より少なかったのである。特に農村部の公学校ではその差がさらに明らかである。1920年代の台北にある孔子廟の前では、台湾人の女子生徒が何人も縄飛びをしているが、まさに近代教育が始まったことを象徴する大きな変化だと言える。勿論、彼女たちが身にまとう服、髪型などはすべて台湾人児童の生活を物語っている。

2. 公学校の教育について

台湾の近代学校制度は植民地統治期に導入されたものである。植民地統治の目標を遂行するために、一貫して台湾人に日本語を教えることになった。まず台湾の人に日本語を覚えてもらわないと何も始まらないので、台湾人児童専用の学校を作ることに決めた。そうして誕生したのが「公学校」である。この頃、日本から来た日本人の子どもたちが通う小学校も台湾に設けられた。

(1) 公学校の成立

1898（明治31）年10月に、台湾の公学校令が發布され、台湾人児童を対象とする初等教育機関「公学校」が発足した。同年に「台湾公学校規則」が定められ、各地方や地域社会の経費によって公学校が設置された。各地域社会に公学校の運営を任せることができたのは、総督府が台湾で積極的に教育を推進し、ある程度地域に圧力をかけた結果ではある。しかし、もともと清朝の統治下にあった台湾は、儒教の影響を強く受けていて、子どもには勉強をさせて、将来の出世を目指すという考え方が根強く存在する土地柄でもあった。そのため、新しい政権の教育を受けて、自分の子弟に将来出世する機会を与えることができるのなら公学校の設置に協力しようとする台湾人も出てきた。

その後、資本主義の影響で台湾の経済も社会もさらに発展し、台湾人の教育に対する需要もさらに増えた。その時の台湾総督明石元二郎は教育によって「同化」政策を進展させる必要があると認識するようになった。そして、1919（大正8）年に台湾教育令を公布し、台湾での学校制度を確立させた。その後、1922（大正11）年に、当時の台湾総督田健治郎がさらに台湾教育令を改定し、「内台共学」の方針を立てたが、この改定によって日本人と台湾人がすぐに同じ学校に通えたわけではなかった。改定新台湾教育令の第二条には「国語ヲ常用スル者ノ初等普通教育ハ小学校令ニ依スル」、第三条には「国語ヲ常用セサル者ニ初等普通教育ヲ為ス学校ハ公学校令トス」との規定があった³⁾。これによれば、日常では日本語を話さない、話せない台湾人の子どもたちは、今まで通りに公学校に通うことになる。つまり、法令上における日本人と台湾人の教育上の隔たりは取り払われたかに見えたが、一部の都市小学校には台湾人子弟の入学者が現れた以外、殆どの地域では何も変わらなかったのがあった。

1937（昭和12）年に戦時体制への移行とともに、日本本土では小学校を国民学校へと改名し、「皇

国民」教育の実現を図った。その後、すぐに台湾も「国民学校令」を発表し、1941（昭和16）年4月から台湾人が通う公学校（分教場も含め）も小学校と同時に「国民学校」へと改名すると決まった。ただし、学校の名称は同じ「国民学校」にしたが、日本語を常用しているかどうかを基準に別々のカリキュラム表が制定され、日本人と台湾人児童が通う学校は相変わらず別々のままであった⁴⁾。

(2) 公学校の教育内容

台湾における植民地統治の方針は「無方針主義」から「内地延長主義」、そして「皇民化運動」の3段階があり、この統治方針の変化により、教育政策も公学校の教育や教科書などの教育内容にも影響を及ぼしていた。公学校教育の内容は日本本土の小学校とは異なるが、基本的には総督府の方針に従い、教科書も総督府が編集したものを使用していた。

前述したように、公学校教育の最初の目的は国語教育を実施するためであった。言葉によって台湾人を「同化」という方針からすれば、日本の精神や文化も植民地の人びとに教えこむことが最も重要な内容であった。これらの目的と当時台湾社会の実態を考え、総督府が公学校の運営に直接かわる「台湾公学校規則」を制定した。規則の中には、公学校の各科目では子どもたちが自由に国語を使う能力を養成し、また学生の身体発達の段階にそって授業を行うべきだと規定されていた。では、規則に定められている公学校教育のポイントを見てみよう⁵⁾。

①国語を精通させること。

台湾人生徒たちに日本語を教えることが最も緊急で優先すべき目標である。日本語の普及は直接に植民地統治の安定につながるだけでなく、最終的に日本語によって日本の文化と歴史などを伝えることで、忠良なる日本国民の育成にもつながる。

②道徳教育を施すこと。

公学校のもう一つの重要な役割は道徳教育を施すことである。植民地統治初期の台湾は未開化の地と言われていた。台湾島の西部の平地や物品の集散地には中国大陸からの移住者（主に漢民族）が集中して定住していた。そして、山地や交通が不便なところには、平地に住む人びとと言葉も文化も異なる台湾の先住民たちが住んでいた。平地に定住している漢民族の伝統文化や習慣が定着し、漢民族社会の強い「男尊女卑」思想が中心的価値観であったため、婚姻制度などにも様々な陋習があった。また、当時の日本人の目からは、台湾人は自己中心、貪欲、賭け事好き、不誠実などなどの欠点が見られていた。そのため、公学校でよい日本国民を育てるには、まず子どもの時から正しい道徳観を教えることが必要だと考えられた。

③生活に必要な知識と技能を授けること。

植民地統治の最も大きな目的は宗主国の経済的利益にある。日本の植民地統治も例外ではなかった。植民地の人びとを経済活動に貢献できる即戦力にするには教育の力が必要であった。公学校は初等教育機関であるが、カリキュラムや教科書には農業、工業、商売、公民社会などに関する基礎的な知識を数多く取り入れた。最低限の生活能力を育成するのも公学校教育の目標の1つであった。低学年の教科書では家事手伝い、子守、畑仕事の手伝い、手紙の書き方などの基本的知識も教えていた（写真2）。

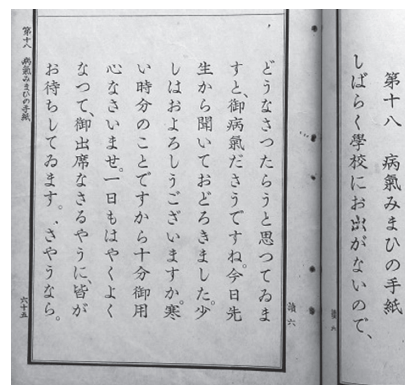


写真2

④日本国民として必要な性格の陶冶。

植民地の統治方針は時期によって調整されるが、台湾人を日本国民に育成することは公学校教育が持つ一貫した基本方針であった。教科書を通して、天皇への忠誠心、日本国民として持つべき性格などは日常生活の中から教え込んでいた。日本の国体にかかわる神話や重要な行事なども教材として取り入れられた（写真3）。

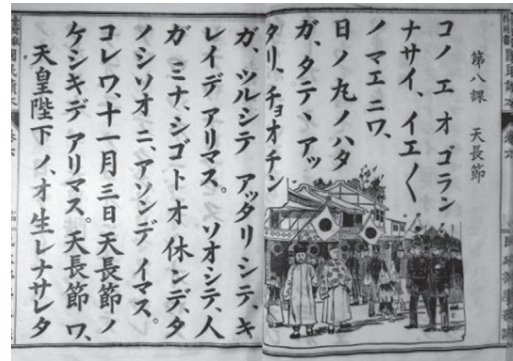


写真3

⑤身体の発達を重視すること。

学校にとって健康な少年国民を育てることも大切な役割である。特に昔の台湾では衛生環境が悪く、コレラなどの伝染病などが流行して、大きな問題となっていた。公学校では生徒の生活習慣から体を鍛えることまでに目を配り、統治中期以降は公学校でも健康診断が定期的に行われるようになった。

上述の内容をまとめると、台湾を統治するために、公学校の任務は言語上の障害を排除する以外に、国民精神の養成、実学知識と生活能力の育成が重要な内容になっていた。

3. 教科書からみる子どもたちの学校生活

「学校」という近代的な教育制度は日本が台湾へ持ち込んだ重要なものの1つであった。特に台湾人児童が通う「公学校」では、セレクトされた色々な「日本」が教えられていた。例えば台湾の子どもに全く縁のない鯉のぼりやお雛祭りのお飾りなども重要な教材となって教えられていた。しかし、このようなものは実際一般の台湾人家庭には飾ることがほとんどないので、公学校の教室で飾られたり、教科書でも学校の行事として描かれていたり、台湾実際の状況に合わせた折衷案が採られていた⁶⁾。このように、台湾人児童にとっての初めての「学校」は様々な行事やイベント、日本の文化、近代的な知識に触れる重要な場所でもあった。

(1) 朝礼や授業風景などの日常

国語教科書に描かれている児童の日常生活は、このような日本伝統の行事以外に、学校内のことよりは学外の生活を描くものが多かった。家庭の中や放課後、休み中のシーンもよく出てくる。逆に学校の中で行われる行事はあまり教材として取り入れられていなかった。学校で起きているシーンはおおむね教室での授業風景や朝礼の様子、校庭で遊ぶシーンなどが中心であった。第三期の国語教科書以降は運動会の教材も採用されるようになった。

まずは教科書の中の朝礼を見てみよう。今まで書房や私塾教育が中心だった台湾では、大きな教室や校庭がある「学校」の存在がなかった。植民地初期の公学校も廟に場所を借りたりして運営してきたところが多かったので、ようやく共用の教科書に朝礼の風景が描かれる大きくて立派な挿絵が採用されたのは1937年からの第四期国語教科書（巻1、写真4）であった。写真5はある公学校の卒業写真集に残されている実際の朝礼写真である⁷⁾。みんなきちんと整列して校長先生の話の聞いたり、始業式や終業式等もきちんと公学校の行事として行われてきた。

次は公学校での教室の授業風景だが、授業シーンの挿絵は第一期の国語教科書からあった。その時台湾の統治状況はまだ安定しない時期だったため、学校の先生も制服を着るのが普通であった。しかし、生徒さんの姿は全員短髪で和服もしくは制服に類似する服を着ていた（第一期巻1、写真6）。これは総督府が望む理想的な授業風景だったのであろう。実際の台湾人生徒の姿がその次のページの広

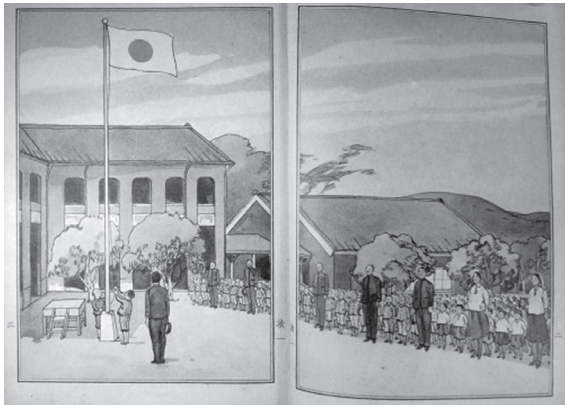


写真4



写真5

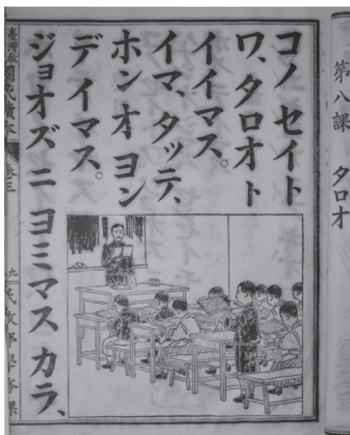


写真6

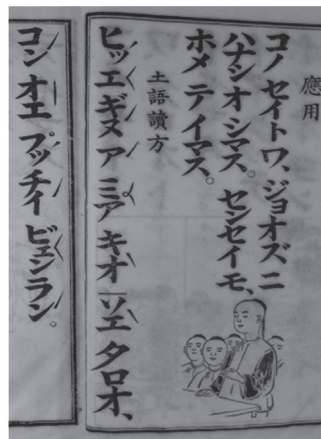


写真7



写真8

用部分に登場するが（第一期巻1、写真7）、そこに描かれているのが和服姿の子どもではなく、長い弁髪で台湾服の姿であった。当時の日本と台湾の違いも教科書の挿絵を通して表現されていた。

さらに、1920年代から1930年代に使用された第三期の教科書になると、教室だけではなく、先生と子どもたちが立ち話をするシーンまで描かれるようになった（第三期巻2、写真8）。注目すべき点は、子どもたちが着る服は和服と台湾服の両方が存在することである。実際の公学校では、このように日本人の子どもと台湾人の子どもが一緒に先生と話すシーンはとても珍しいものである。なぜなら、初等教育段階では台湾人児童と日本人児童は基本的に共学ではなかったため、この風景は決して日常的なものではなかったからだ。また、台湾人生徒の髪型の変化について、1920年代になると台湾ではお年寄り以外、長い弁髪の台湾人はすでに男女問わずめっきり減った。

(2) 運動会、学芸会などの学校行事について

日本統治時期の公学校卒業記念集や写真集を見ていると、必ず校長や教員の顔写真、卒業するクラスの集合写真が載せられている。その次は朝礼や運動会、学芸会、修学旅行⁸⁾の写真である。

まずは運動会に注目してみよう。これまでの台湾の書房教育や私塾などでは運動会というものがなく、体を動かして健康を保つなどの概念もなかった。しかし、公学校の運営基準となる公学校規則には、生徒の体を鍛えさせて健康を大切に定める規定がある。学校で運動会を行うのは、そのための重要な行事の1つであった。

最初に採用された運動会の教材は第三期教科書巻2の五「ウンドウクワイ」である。写真9には、

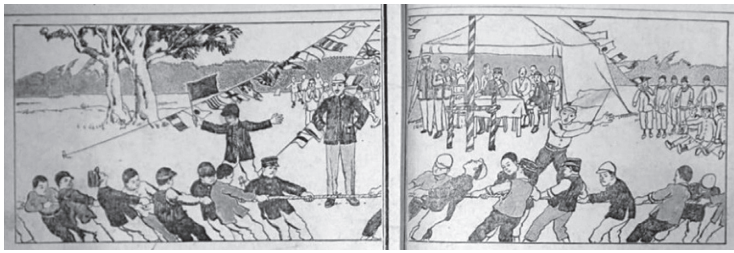


写真 9

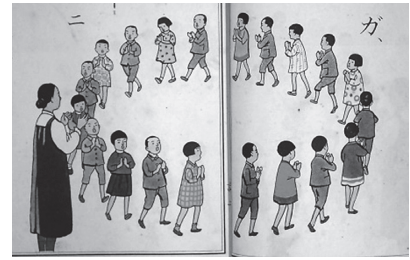


写真 10

台湾服を着ている生徒たちが一生懸命に綱引きをしていて、学校の先生たちもいて、横には台湾服を着ている保護者の姿が描かれている。もう1枚は第四期教科書巻2の挿絵（写真10）である。第三期とは違い、1年生が円になってお遊戯をしており、女性の先生が横で見守っている様子が描かれている。

これらの挿絵で注目すべきポイントは2つある。1つ目は、生徒たちの足元である。第四期教科書の挿絵では、児童たちが靴を履いているが、第三期の挿絵では足元の部分は描かれていなかった点である⁹⁾。そこで、実際の公学校運動会を見てみよう。これは1939（昭和14）年台北大橋公学校の卒業文集に載っている写真である（写真11）。みんな裸足で競技をしている様子が分かる。もう1枚の台北の太平公学校の写真（写真12）でも、男女生徒は全員裸足で体操をしている。前編では、靴は台湾人児童にとって貴重なものであることについて説明した。このような風景は現在ではもう見られないが、当時の台湾人生徒たちの元気な姿が目浮かぶ。



写真 11

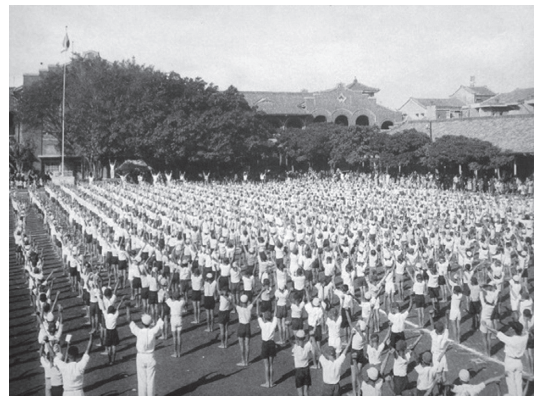


写真 12

2つ目の注目点は挿絵に描かれている見学の保護者である。第四期の「ウンドウクワイ」にも「ケフハ、ウンドウクワイデス。ケンプツニンガ、タクサン キテキマス。イマ、一年生ガ、ハトポツポノ イウギヲ シマシタ。ヒトリモ マチガヘナイデ、 ジャウズニ シマシタ。ケンプツニンガ手ヲ タタイテ ホメマシタ」と述べられている。しかし、昔の台湾社会では親が仕事や畑の作業で忙しいので、学校へ行ったり、運動会を見学したりする話はあまり聞かなかった。ここに描かれているのが実際の状況なら、都会地や相当教育に関心を持つ地域に限定されるものであって、普遍的な状況ではないと考えられる。

(3) 学校の所在地によって違う実科の授業

植民地時代の公学校の古写真を調査しているときに、予想できる学校行事の写真以外に、よく見かけるのが公学校での農業実習もしくは女子児童が裁縫の授業を受けている写真である。実は、公学校

の教科目は国語、算術、地理、歴史、理科、修身等以外に、実科という科目も存在していた。実科教育に関する規定は違う時期の公学校規則によって変更されるが、第二回の台湾教育令（1922年）以降の規定を見てみよう¹⁰⁾。

1922（大正11）年の第二回の台湾教育令によって、公学校に関する様々な規定も改訂が行われた。公学校での科目について、「台湾公立公学校規則」の第17条では「修業年限六年ノ公学校ノ教科目ハ修身、国語、算術、日本歴史、地理、理科、図書、唱歌、体操、実科、裁縫及家事トシ随意科目トシテ漢文ヲ加フ 実科ハ農業、商業、手工ニ分チ其ノ一種又ハ二種ヲ男児ニ課シ裁縫及家事ハ之ヲ女児ニ課ス 土地ノ情況ニ依リ漢文、裁縫及家事ハ之ヲ闕クコトヲ得」と記されている。また、実科に関し、第33条では「実科ハ実業ニ関スル近易ノ知識技能ヲ修得セシメ勤勞ヲ尚ヒ実業ヲ重ムスルノ氣風ヲ養フヲ以テ要旨トス 実科ハ土地ノ情況ニ適切ナルモノヲ選ビ（下線は筆者、以下同）實際ノ業務ニ必要ニシテ児童ノ理解シ易キモノヲ授クヘシ（後略）」と定めている。

さらに、同じ第17条には「(前略) 実科ヲ授クルニハ常ニ經濟ニ留意セシメムコトニ務ムヘシ」とも明記されていた。これによれば、国語などの主要科目以外に、公学校では所在地や児童の性別によって実科授業を設け、その内容も地方実際の「経済」の需要によって学校が決められることとなっている。要は、公学校の教育は知識の伝達以外に、地方の経済に役立つ労働力を育てるためのものでもあった。

例えば、農業の実科科目に関し、公学校規則の第33条に「(前略) 農業ハ栽培、肥料、養畜、養蚕、森林、水産等ニ就キ土地ノ情況ニ適切ナルモノヲ授ケ且實習ヲ課スヘシ」と具体的に定められ、完全に地方の経済特徴を反映する内容となっている。なお、農業は基本的に男子のみで第5学年と第6学年の2年間で受ける授業だったが、1933（昭和8）年の規則改定で実業教育の徹底が求められ、六年制公学校及高等科において、男児のみに課される実業に関する教科目は女子にも課されるようになった¹¹⁾。写真13は公学校における農業実習の実際の風景である¹²⁾。

なお、実科科目の教科書について、国語教科書には実業教育関連の教材も多いが、男子用の公学校農業書や商業書等は昭和5年ごろに刊行されていた。写真14は農業教科書の写真である¹³⁾。また、1937（昭和12）年には「公学校女子農業書」も刊行された。

女子向けの裁縫や家事について、公学校規則の第34条に「裁縫及家事ハ女子ニ須要ナル普通ノ技芸及近易ナル家事上ノ知識ヲ得シメ兼テ勤儉、整頓、清潔、利用ノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス」との規定がある。時期によって変更があったが、この時期では女子の裁縫は第4学年からの授業となっていた。1933（昭和8）年の規則改定では、裁縫と家事は六年制の公学校において、土地の状況によって設けなくてもよいとのことになったが¹⁴⁾、女子児童が第5学年、第6学年で使う公学校家事書は



同上農業實習堆肥精選状況

写真13

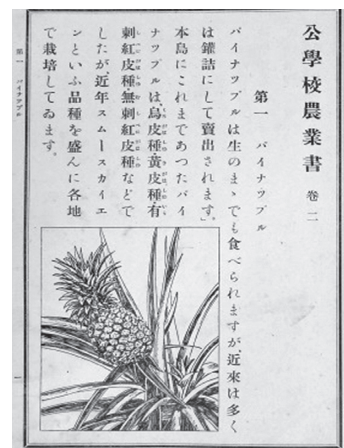


写真14

1937（昭和12）年には刊行されていた（写真15）¹⁵⁾。

(4) 身体検査

日本が台湾で実施した植民地統治は様々な目的を持っていた。その1つの目的として、亜熱帯の台湾で日本人の体は順応できるかどうかを調べるために、日本人児童を対象とする身体検査や成長状況を追跡する調査が行われていたようである¹⁶⁾。公学校における台湾人児童の身体検査に関し、公学校が発足して十年以上経ってからの1910（明治42）年によく「台湾公学校児童身体検査規程」が発令されたのである¹⁷⁾。

植民地統治が始まる前の台湾はいくつもの重大な衛生問題を抱えていた。それは生活環境の「不潔」、民間の陋習によるアヘン問題、纏足問題などである。特に不潔な環境によって、鼠によって感染する「ペスト」が大流行し、1917（大正6）年に病勢が収束を迎える頃まで、日本人を含めて約24,120名の死者を出した¹⁸⁾。また、明治期の終わり頃から、蚊によって伝染する「マラリア」の流行が始まり、総督府の伝染病対策の重心もペストからマラリアへ移行したなど、台湾の衛生問題が重大であった。そのような状況を受けて、台湾の環境問題改善には台湾人児童の教育や健康問題も深くかかわっていることから、公学校における児童の身体検査の実施につながった。

公学校の身体検査は基本的に当時の文部省の規定に準拠しているが、統治初期では女子児童のみ「天然足と纏足との別」の項目が設けられていたなど、台湾実際の社会状況に合わせて実施されていた。身体検査（第四期巻7、写真16）¹⁹⁾をテーマとする教材は国語教科書にも取り入れられている。当時の台湾人児童にとっては、3食が満身に食べるのも大変な家庭が多いなか、学校で身体検査してもらえることがとても印象深いことだったそうである。当時の成績表にも身体検査の結果が記録されているので、写真17のように大事にとっている台湾人卒業生も多い²⁰⁾。

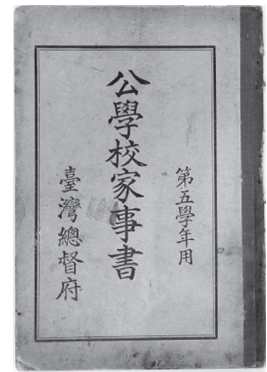


写真15

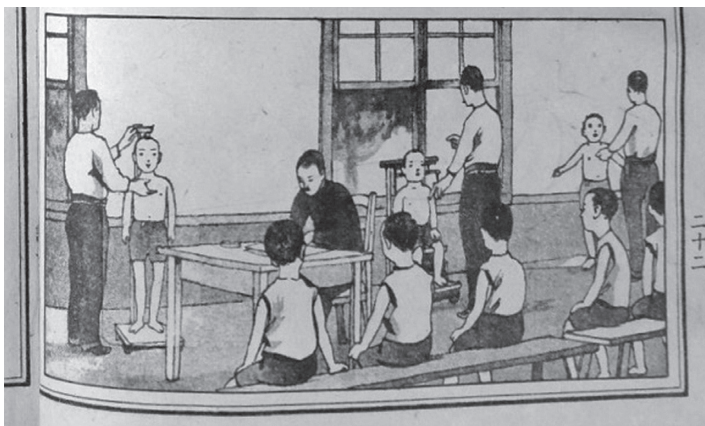


写真16

姓名	性別	胸圍	體重	身長	検査年月日		年齢	学年	備考
					月	日			
米	男	米	米	米	四月	米	米	第一年	
米	男	米	米	米	四月	米	米	第一年	
米	男	米	米	米	四月	米	米	第一年	
米	男	米	米	米	四月	米	米	第一年	
米	男	米	米	米	四月	米	米	第一年	
米	男	米	米	米	四月	米	米	第一年	
米	男	米	米	米	四月	米	米	第一年	
米	男	米	米	米	四月	米	米	第一年	
米	男	米	米	米	四月	米	米	第一年	
米	男	米	米	米	四月	米	米	第一年	
米	男	米	米	米	四月	米	米	第一年	
米	男	米	米	米	四月	米	米	第一年	

写真17

「おわりに」にかえて

本研究は教科書を手掛かりに台湾人児童が過ごしてきた公学校での生活について考察を行ってきた。家庭での生活とは違い、日本が台湾の子どもたちに見せたのは「公学校」という全く新しい近代的な産物であるため、学校行事から教育内容まですべてが子どもたちにとっては新鮮で面白い物ばかりであった。もちろん、その中身は総督府が意図的にセレクトした、見せたい、教え込みたいものであった。

一見、台湾総督府は台湾の教育に力を入れているようにも見えたが、公学校が台湾人児童に施した

教育は基本的に最初から、子どもたちの関心が政治に向かないようにすることを目的としていた。日本語を教え、統治の便を図るのが主な目的だということも明らかであった。教科書で学問や勉強を勧めながらも、将来は誠実な奉公人、商売人や労働者になるようにセレクトされた教材が取り入れられていた。そのため、教科書の中には基礎的な実学知識がたくさんつめられているにもかかわらず、すべて初歩的なものにとどまっている。頑張っ て学問を追究して、将来は出世してえらくなるという可能性を示唆する教材はなかった。忠誠なる日本の国民として、地域の労働力となり、日本に尽くすように教え込むのが教材を編集する時の基本的なスタンスであった。

しかし、子供たちの生活は家庭や学校以外に、社会環境による影響も大きく存在している。50年間にわたる日本の植民地統治と社会開発は台湾の社会構造や経済環境を変えてきた。今後も教科書の内容を手掛かりに、その変化はどのように子どもたちの生活に影響を与えたか、何を変えたのかについて追究していきたい。

注

- 1) 陳虹彪、日本統治下台湾人児童の日常生活について — 国語教科書を手掛かりに —、平安女学院大学研究年報第 17 号 (2017.3)、pp.18-25。
- 2) Harry A. Frank (1924), Glimpses of Japan and Fomosa, he Century Compan.(ページ数未表記)。
- 3) 台湾教育会 (1929)、台湾学事法規、帝国地方行政学会出版、p.373。
- 4) 台湾教育会 (出版年不詳)、台湾学事法規完、帝国地方行政学会出版、pp.373-374。
- 5) 台湾学事法規 (台湾教育会、1929)、台湾学事法規 (台湾教育会、出版年不詳)、台湾教育沿革誌 (台湾教育会、1939) などに掲載されている内容により、筆者がまとめた。
- 6) 同上 1。
- 7) 台湾港公学校 (1932)、卒業記念写真帖、ページ数未表記 (国立台湾図書館所蔵)。
- 8) 「台湾公学校国語教科書の観光・旅行記述に関する一試論 — 第四期『公学校用国語読本』(1937-42年)を素材として —」(陳虹彪、平安女学院大学研究年報第 10 号 (2010 年 6 月)、pp.20-27)。
- 9) 台湾秋恵文庫所蔵写真。
- 10) 台湾教育会 (1939)、台湾教育沿革誌、台北：台湾教育会、pp.217-409。
- 11) 台湾教育会 (1939)、台湾教育沿革誌、台北：台湾教育会、p.387。
- 12) 台湾教育会、潮州農業実習写真、『臺灣教育』第 209 号、巻頭付録写真。
- 13) 『公学校用農業書』巻 2、台湾総督府 (1930)、玉川大学教育博物館所蔵。
- 14) 同上 11。
- 15) 『公学校家事書』第五学年用表紙、台湾総督府 (1937)、玉川大学教育博物館所蔵。
- 16) 范燕秋 (2005)、「疫病、医学与植民現代性 — 日治台湾医学史」、稲郷出版社、pp.11-62。同書では、総督府が衛生問題を解決したいのは台湾人のためではなく、本当の目的は日本人の健康を守ることにあるとも指摘している。
- 17) 台湾教育会 (1939)、台湾教育沿革誌、pp.390-391。
- 18) 「本島衛生警察の回顧」、台湾警察時報、n.259 (1937.6.7)、pp.78-90。
- 19) 写真 2、3、4、6、7、10、16 は復刻版教科書 (台湾教育史研究會策畫 (2003)、日治時期台湾公学校と國民校國語讀本復刻版、台北：南天書局)、写真 8、9 は筆者が所蔵しているものにより撮影されたものである。
- 20) 林晋禄氏 (台湾台南在住) 提供。

陳 虹彬

【謝辞】 本研究は JSPS 科研費（課題番号 15K17366）の助成を受けたものである。

Daily Life of the Taiwanese Children under the Colonial Government Part 2

— Analyzing the Japanese Textbooks as a Clue —

CHEN, Hung wen

This study focused on the school life of Taiwanese children during the colonial period. Unlike the usual family life, the modern “school” was a completely new experience to for the Taiwanese children. Everyone enjoyed the school life, but it also meant they received the education embodying the colonial ideals designed by the colonial government. Especially the practical subjects were structured to meet the local economic needs, faithfully reflecting the economic purpose of colonial rule.